

書評

衣笠一茂著

『ソーシャルワークにおける「価値」と「原理」
—「実践の科学化」とその論理構造—』

A5判 / 280頁 / 定価8,000円+税 / ミネルヴァ書房, 2015年

今井 小の実

関西学院大学人間福祉学部

最初に告白しておかなければならない。筆者は社会福祉の研究者ではあるが、女性やジェンダー問題への関心から歴史学的手法によって研究を行っており、ソーシャルワークについては研究者レベルからいえば専門外ということである。それでも本書がたいへんな労作、優れた研究成果の結晶であることはすぐに理解できた。なぜならその研究が、明確な問題意識にもとづいた「目的」のもとで、先行研究の丁寧なレビューから得た知見とその限界から課題を設定し、「実証研究」によって検証、分析、考察という方法をとった、「研究」の作法をきちんとふまえたものだったからである。さらに、本書ではこのような単著が時折見せる、バラバラな研究成果の寄せ集め感もみられない。終始一貫した問題意識と目的のもとで論旨が展開され、入り口と出口、その間の論証過程の關係に“ぶれ”がなく、著者の確かな文章力がそれを支えている。本書の質は、同志社大学大学院社会学研究科に出された博士論文の成果であったことから担保されているが、まさに博士論文にふさわしい研究だといえる。

本書は以下のように構成されている。

序章 「危機的状況」にあるソーシャルワーク
—新しい「価値」と「原理」の論理構造

について論究する必要性

- 第2章 ソーシャルワークの新しい「価値の在処」
についての論究—他者との「関係性」への
関心、そして「共同性の価値」への志
向
- 第3章 「実践の科学化」に向けて—ソーシャル
ワークの「語り」を読み解く具体的な研
究方法とは
- 第4章 葛藤する実践の「語り」を読み解く—回
復期リハビリテーション病棟における
ソーシャルワークの構造分析
- 第5章 ソーシャルワークの新しい「原理」と「価
値」論の展開—岡村理論の批判的検討と
その弁証法的止揚を通して
- 第6章 「価値の実践」としてのソーシャルワ
ーク論の再構築—「意味の媒介の社会的実
践」の具体的なソーシャルワークのあり
方
- 終章 「実践」が「理論」に問うもの—「実践
の科学化」のこれからの展開を目指して

冒頭でも述べたように著者衣笠氏の問題意識は
はっきりしている。認知症や高次脳機能障害、精
神や知的に障害がある人、経済的・社会的な貧困
の連鎖のなかにある人、「限界集落」に暮らさざ

るをえない人々など、近代的な社会が求める個人のあり方からこぼれ落ち、社会から疎外・排除され、「生活主体」としての立場を脅かされている人々がいるにもかかわらず、ソーシャルワークは「判断」し「自己決定できる個人」を前提に実践を行ってきた (p. 2) ということに対する強い不信感である。そればかりか、ソーシャルワークは「近代市民社会」の要請を受け、「権利と義務の主体」へと「個人を陶冶する技術」として発展し (p. 2)、そのような社会と個人像の形成と維持に加担してきたのである。したがって衣笠氏は、本書の目的を、社会的文化的背景の異なる欧米からの議論の導入と実践への適用を中心にしてきた従来の議論を検討しながら、ソーシャルワークの理論的・実践的基盤となる「価値と原理の論理構造」を論究し、新たなその存在意義と、実践のあり方についての「包括的な論理的基盤を提示すること」に置かれた (p. 3) のであった。

そのために、まず氏は、ソーシャルワーク実践が尊重してきた「自己決定できる個人」が近代市民社会が生み出した個人像であることを哲学の系譜から説明した上で、先行研究の整理によってその限界を明らかにされた。そして回復期病棟における実証研究を通して導きだした実践に共通していた「価値」、すなわち「相互に存在を肯定する関係性を構築すること」に、社会哲学の知見である「共同性の価値」を援用して実践の「原理」を見出し、そこに「自己決定できる個人」像の限界を乗り越える論理を求められたのである (p. 251)。さらに衣笠氏は、理論的には岡村理論を止揚するという形で、そして実践的には「生活困窮者レスキュー事業」と「過疎地域における地域づくりプロジェクト」のエスノグラフィーの分析を加え、実践の論拠を多様な「意味の媒介」にもとづく社会全体の「豊饒化」という論理に求め、研究の実証性を補強している。このようにして氏は、「すべての人々の尊厳の尊重」を実現するソーシャルワークの論理を構築するために、その実践を、「能力の共同性」を中心とする「共同性の価値」

を「様々な能力が、相互かつ多様に関わり合うことによって」具象化した「意味の媒介と合意形成の実践」の社会装置として再定義されたのである (p. 252)。

このように本書は優れた研究の成果であるが、やや疑問あるいは不満に思った点がある。そのひとつは衣笠氏自身も述べられているように、近代市民社会においてソーシャルワークが要請される「論理的必然性」と、その根拠となる固有の「価値」と「原理」の論理構造に関する論究については「一定の成功」をおさめられているが、そのソーシャルワークが媒介・再分配する具体的な「意味」については、実践例を通して触れられたものの、未だ十分とするにはいたらない (p. 254) 点である。これについては衣笠氏自身が、今後の課題として挙げられているので、研究のさらなる発展に期待したい。

もうひとつは、衣笠氏が利用された岡村理論と本研究の関係についての説明が、他の部分に比べてやや不十分な印象を受けた点である。氏は本書において、本論の内容はもちろんのこと、用語の定義、先行研究の検証、研究方法の妥当性など、その枠組みに対する説明も惜しまれず、丁寧かつ慎重に研究を進め論理を組み立てられている。それが本書の質の保証にもつながっている。岡村理論が、氏が論じてこられた社会哲学や社会思想の研究成果をソーシャルワークの理論におとしこみ、新たな理論を構築するために必要なことは理解できる。実際に衣笠氏は、岡村理論を利用する理由を、「生活」を「関係」から把握する視点を提唱し、「西田哲学と和辻倫理学を基礎」とする「主体」のあり方についても共通の関心があることに求め、氏の論究を同理論に照射することによって、ソーシャルワークの「価値」と「原理」の論理をより深化させられる可能性に期待をよせられている (p. 181)。すなわち、「相互に肯定する関係性構築の原理」と「共同性の価値」を、岡村理論のソーシャルワーク理解を経由することによ

て「個人と社会との二項対立的矛盾の弁証法的統合に向けた実践の基盤」として位置づけようとしたのである (p. 195)。そして西田哲学の二重否定の論理を援用しながら、「相互に交換・交感・作用しつつ、主体と客体との往復関係」のなかで「真の可能性」を発露せしめる、ソーシャルワーク実践の主体性についての論理的構造を探究 (pp. 195-196) されたのであった。

けれども、岡村重夫の想定した「個人」もまた、京大哲学の系譜をひいた「近代市民社会」の一員として「自己決定できる」個人なのである。もちろん衣笠氏はそのことを十分に理解し「わずかではあるが決定的に異なる一点」(p. 194) とされている。そして、西田哲学の場所的弁証法を媒介し構築された「岡村理論の基本的な論理構造を了解しつつ」も、必要なのは、「個人と社会、主体と客体、自己と他者」が会う「場」において、「語りかつ行為できる」という近代市民社会が要請した個人像以外の「個人」が生成する「意味」をも「発露・肯定せしめるような」実践を構想すること (p. 195) だとされたのであった。であるのなら、このような「決定的に異なる一点」をあえて採用する理由について、もう少し紙面を割いた論述がほしい。ただこれは、この分野の専門ではない“素人”ゆえの不当な要求なのかもしれないと思う。

さらに、これは今後の研究に対する要望になるが、誰も排除しないソーシャルワーク実践のために「個人と社会の再統合」をめざしたこの“挑戦”を一層、完璧にするためにも、今回の研究で岡村の「主体性」の理論が持つ「望ましい個人」像を克服するソーシャルワーク実践の「価値」や「原理」を提唱されたのであれば、次にはぜひ「社会」についても岡村理論の限界を超える追究を行って頂ければうれしい。従来のソーシャルワークの「価値」「原理」が「近代市民社会」の必然にもとづく創造物だったなら、「社会」についてもその視点から論じ、そこを乗り越える必要があると考えるからであり、そこではじめて西田哲学の二重否

定の理論も活かされるのではないかと感じたからである。とはいえ、これも歴史学的手法をとる筆者のやや偏った要望のような気がする。

最後に、本書の意義をもう一度、強調しておきたい。本書は、実践現場で「自己決定」できない人たちとかかわってこられた衣笠氏の、彼らあるいは彼女たちへのひとつの応答であり、本書の刊行自体がその人たちのための“アドボケート”としての実践なのだということである。

ソーシャルワークの理論と実践の体系を、「実践の科学化」を通して「既存の理論と実践を止揚」しながら、社会を豊饒にする新たな「意味」を獲得する論理を生成してゆくダイナミックな体系 (p. 251) だと論じられた衣笠氏の研究は、社会福祉学の独自性を追究し、「実践の科学化」のために常に「実践と理論の往復」の重要性を強調されてきた、恩師岡本民夫氏の問題意識と提起を継承、発展させた果実ともいえよう。その研究への真摯な姿勢はむろんのこと、実践に対する誠実な姿勢に、何度も胸をうたれ、込み上げてくる涙を抑えきれなかったことを伝えておこう。ぜひソーシャルワークの専門家のみならず、広く社会福祉の実践、研究に携わる全ての方たちに読んで頂きたい一冊である。

リプライ

ソーシャルワークにおける「価値」と「原理」～「実践の科学化」の論理構造

大分大学福祉健康科学部 衣笠一茂

まず、本書を深く読み込んでいただき、筆者の意図するところを余すことなく評価していただいた上で、研究の次なるステップへの端緒となる論

点をいただいた、評者・今井木の実氏に、深く感謝申し上げたい。

本書はけして一般的な内容ではないし、また概念上の操作も複雑な側面があるため、「難解である」という評価を読者の方々からいただいたこともある。そのなかで、今井氏のご指摘は誠に的を射たものであり、今井氏からのコメントへの返信を含め、筆者が本書において「表現」したかったことは何か、を改めて明示することによって、いただいた書評へのリプライとさせていただきたい。

まず、本書を「研究の作法をきちんと踏まえたもの」という今井氏の評価に感謝の意を表したい。

得てして安易に「思想」や「概念」、「価値」や「原理」が語られる状況の中で、筆者自身がまず念頭に置いたのは、「研究方法論が明確に確立していること」であったからである。そのために、単なる概念を振り回す研究ではなく、「実証の方法」の検討に多くの紙数を割いたし、また研究方法についての先行研究のレビューについても、可能な限り徹底して行ったつもりである。

近年、「エピソード」や「スノーボール・サンプリング」などといった、こう言って良ければ「お手軽な」質的調査研究方法がもてはやされる中で、本書の執筆においては「いかなる方法を、どのような論理的根拠を持って使うか」を常に意識していた。その意味において、本書をその思想的プロダクトの側面からではなく、研究方法論のあり方を示すものとしても、一定のリファレンスとなれば幸いであると考えている。

そのうえで、今井氏の指摘について、順を追って以下のように応えていきたい。

まず、「ソーシャルワークが媒介・再分配する具体的な『意味』については、実践例を通して触れられたものの、未だ十分とするには至らない」という点についてであるが、これは筆者自身が述べているように、今後の課題として研究を継続して追究してゆきたいと考えている。実際に、本書

を読んでいただいた多くのソーシャルワーカーをはじめとする実践者の方々から、「言っていることは分かるが、ではどうするのか」という問いを数多くいただいており、その問いに答える責務を痛感しているところである。

また、筆者自身も、大阪府社会福祉協議会「生活困窮者レスキュー事業」、大分県福祉保健部「地域福祉力再生事業」、福岡県社会福祉協議会「ライフサポート養成事業」など、ミクロからマクロにいたるさまざまなソーシャルワーク実践のフィールドと関わる機会を持っており、これらの実践での経験を「科学化」することによって、本書において提示した内容をより具体的に担保してゆく研究の継続を志向している。いわば、本書をconceptual frameworkとしたdiffusion lineとしての第2の成果物が必要であることは十分に認識しており、これは今後の研究の成果を持って今井氏の指摘に応えたいと思ふところである。

次に、「岡村理論と本研究についての説明が、他の部分に比べてやや不十分な印象を受けた」という指摘について応えたい。これは、流石に社会福祉の歴史的研究を専門とされる今井氏ならではの指摘であり、改めて、ここまで本書を読み込んでいただいた上での指摘をいただいていることに深く感謝するところであるが、本書において岡村理論との関係について「敢えて深く踏み込むことを避けた」のは、以下のような理由による。

今井氏も指摘するように、岡村理論のベースとなっているのはいわゆる京都学派、なかでも西田哲学と和辻倫理学であるが、筆者は本研究を通じて岡村理論の基礎をなしているこれらの理論、とくに西田による「絶対矛盾的自己同一」の弁証法への理解が、岡村においては十分に理解されていない、あるいは（極論すれば）曲解されている、という結論に至った。西田哲学においては必ずしも近代的個人という主体性が前提とされているわけではないにもかかわらず、岡村は自らが提唱する近代的主体の論理的正当性を担保するために西田哲学における弁証法を経由する、という構造を

っており、この構造そのものが西田哲学のもつ近代の弁証法的止揚への可能性を制限するもの、と筆者は考えるに至ったのである。

しかし、こうした論理展開は、それそのもので一個の研究を必要とするものであるし、何よりも筆者は本書を思想書や概念書としてではなく、「実践論」として提出したかった。そのため、これら岡村理論の矛盾の構造については最低限の記述にとどめ、その問題点を指摘しつつ西田弁証法と和辻哲学を経由するという岡村の論理的手法をいわば「換骨奪胎」し、自らの論理的妥当性と独自性を担保する、という「戦略」を採った。

そのため、本書における岡村理論との関係についての記述自身は、今井氏の指摘するように不十分な側面があることは否定しないが、それ自体を取り扱うことが本書の主題ではない、という点をご理解いただければ幸いである。ただ、近年の「岡村再評価」の動きの中で、筆者自身は上述のような問題意識を提出する必要があることも理解しており、これについても何らかの形で「思想的決着」をつけたいと考えている。

最後に、本書が近代市民社会の措定する『『望ましい個人像』を克服するソーシャルワーク実践の『価値』や『原理』を提唱されたのであれば、次にはぜひ『社会』についても岡村理論の限界を超える追究を』という指摘であるが、これはもうご指摘の通りである。言うまでもなく、ソーシャルワークは社会との関連性を失ってはならないし、それがどのような社会を構築することを構想

するのか、についても自覚的でなければならないという点において、今井氏の指摘は妥当なものであると考える。

そのうえで、先にも述べたように、筆者は本書を「実践論」として提出することにつよくこだわった。思想や方法ではなく、まさに「実践」としてのソーシャルワーク、あるいは社会福祉のあり方を「科学」することが本書の目的であり、そしてその「実践論」の追究が、隣接他領域における議論ではない、社会福祉学の独自固有性の担保へとつながると思惟したからである。そして、今井氏が最後に指摘されているように、この「実践論」としての社会福祉理論の展開の必要性こそが、私が師・岡本民夫教授から、もっとも深く影響を受けた「思想」であると自覚している。

最後に、本書のもっとも基本的なモチーフは、いまから25年前、兵庫県芦屋市の在宅介護支援センターにおいて働いていた筆者自身の実践経験へと遡る。人間の尊厳とは何か、生活の価値とは何か、そして社会福祉の「実践」とは如何にあるべきか、について筆者は現実と相對することを通して多くを学んだし、また本書がそうした経験への「リプライ」となれば幸いである。

最後に、このような豊かな議論の場を提供していただいたことに改めて感謝申し上げるとともに、「豊饒な」議論の応答をさせていただいた今井の実氏に、今一度感謝の意を示しておきたい。